

063
1-4

葉
隱

智

№64608

0723
15
4=4

063
1

一 清長乃 荒木九郎 宣統抗事 九月十二日 秘密於中家助
 され元乃 宅前能致伸ける 十月見紅 荒木より 小男
 一とと 虫塚勅馬と物何もたふり 一と荒木後を立勅馬と
 切教 残人殺一切をり 一と松本六郎 行をとお断されたが
 荒木座より 一ととを後より 行を二つ 一とつり 一とらぬ
 一と成るもの 一と行を 首種がき 一とて 一とぬん 一と力も 一と
 一と居る 一と押込 一と徳を 一とと一と 首を 一と川を 一とみ 一と一と 氣分 一と無 一と満 一と成り
 一と流 一と打 一と仗 一とせ 一と果 一と一と 一とより 一と荒木 一とと 一と一と 一と又 一と切 一とて 一と廻 一とら 一と首



圖書

八

一と卷 一と七 一と一と 一と清國 一と諸士 一とに 一と襲 一と取 一と



蒲原存



縣立佐賀
28.10.
圖書館

通ぬる市を切り切し山平事残るる之を遺恨
て思ふと少し付る又之を同代人押通りける世も
所限の故一五年の間に改むる利権等今之通る細
て水合之私に白熱の酒菓は種々不意に言はれてはる白瑞
なり正辨もやしく碎伏し不働の悪名は言ひ不及は好む
大酒の言必之を忘るる中て是之を以て是人懐と是大酒
仕置る之謂わくを性よく之誦る唯唯は之を言ひ
後日妙法不知来し之の志を極の時を以て対すと早速
強付一云が大事成す亦とあり同傍にたれは之を性
よりい後難と不思恥かぬ極事と在極より打
果させてはる大瓶の唯唯は之を以て是人懐と是大酒

家身より世人懐しふは世に武士ははりの時ては
能極と云ふもの

け事江市を切るるは客入法も金鳥山旅客
伊勢賢武に松町旅客の言喚方は旅客伊勢松町市は
松町傳女に初に社を又之を市を更な極入菜のるを
酒が少しはる大酒言金鳥山旅客武鳥の喚方は
此傳の村人数に松町の旅客と茶をるとかけあちこちと
酒を切し市を更と之を以て向合の店より又之は何れ
ふり切中しと見し市を更と之を以て向合の店より又之は何れ
りは大男より之を座中を神口よりと見し市を更と之を以て向合の店より又之は何れ
あかりと見し市を更と之を以て向合の店より又之は何れ

市を美しと切之を力とせしと後又心は市を好む
と漸く一少次の旨と成る家来焼と持の時皆く
其意にさし又之を姓を(一)と動動意を成人の
家元(一)送使(一)傳(一)外(一)市(一)為(一)と(一)轉(一)送(一)一(一)取(一)は(一)市(一)を(一)更(一)に(一)更(一)に(一)
強(一)各(一)一(一)指(一)を(一)所(一)に(一)取(一)歸(一)の(一)病(一)言(一)又(一)之(一)中(一)に(一)動(一)動(一)
酒(一)は(一)醉(一)み(一)之(一)徳(一)枕(一)を(一)使(一)多(一)と(一)市(一)を(一)更(一)に(一)之(一)を(一)絶(一)法(一)成(一)と(一)中(一)
動(一)動(一)立(一)後(一)一(一)式(一)と(一)取(一)身(一)の(一)由(一)流(一)之(一)子(一)の(一)氣(一)候(一)又(一)中(一)
中(一)に(一)一(一)の(一)力(一)は(一)立(一)取(一)と(一)の(一)高(一)を(一)一(一)と(一)中(一)に(一)切(一)て(一)見(一)よ(一)と
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)と(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)市(一)を(一)更(一)に(一)中(一)に(一)向(一)り(一)と(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
又(一)之(一)酒(一)程(一)之(一)切(一)り(一)と(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)一(一)社(一)之(一)人(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)
大(一)酒(一)亦(一)あ(一)り(一)は(一)は(一)何(一)も(一)も(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)と(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)動(一)動(一)

中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)
中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)中(一)に(一)取(一)切(一)り(一)

一 本城久野北官事 先年川上河津内領町田代邊

之志又六人波系諸邊中而酒と持時とら川一橋中
之内久野北官事 先年川上河津内領町田代邊

人其以中日之國に於ては物變り同及人其跡を傳へて
宣化の如く切敷に傳へて其美言を爲すは信實の如く速に
及人斯く系極に取れり其美言を爲すは信實の如く速に
以る如く同及の切敷に其美言を爲すは信實の如く速に
傳へて其美言を爲すは信實の如く速に
同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に
又く其美言を爲すは信實の如く速に
相及人の如く其美言を爲すは信實の如く速に
て其美言を爲すは信實の如く速に
死ねり其美言を爲すは信實の如く速に
切敷の如く其美言を爲すは信實の如く速に

一
友高後と切敷ととて同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に
評定所を以て其美言を爲すは信實の如く速に
相及人の如く其美言を爲すは信實の如く速に
野村源兵衛切敷とて同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に

野村源兵衛切敷とて同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に
友高後と切敷ととて同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に
評定所を以て其美言を爲すは信實の如く速に
相及人の如く其美言を爲すは信實の如く速に
野村源兵衛切敷とて同及の如く其美言を爲すは信實の如く速に

之指使氣血等故諸人^には是存命^に後を切得と仕置等
首をうてと^に時切得^に着声^ををさる^に同切得^に
らぬ^に七付^に紫^に殺す^に下^にと^にか^にれ^にと^にあ^にら^にみ^にけ^に
女情^をあ^にれ^に存^に命^に保^にす^に下^にと^にい^にふ^に扱^に後^にを^に来^に得^にて
卷末^に文字^に切^に前^に後^に已^に出^に時^にか^に青^に色^に成^にり
暫^に服^にを^にふ^にき^に后^には^に小^に鏡^にを^に出^にし^に面^に色^にと^に見^に破^に紙^にを
乞^に時^にの^に受^に結^にき^にて^にま^にま^にか^にと^にい^にふ^に服^にを^にい^にい
ん^に家^にの^にい^にや^にく^に未^には^に思^には^にと^に云^にて^に様^にぬ^にけ^にと^にい^にふ^に後^に又
り^にく^にそ^に喉^に入^に死^にん^に多^にる^に跡^にを^に思^にひ^にさ^にる^に下^にと^に云^に是^にを^に信^に受^に
ん^にせ^によ^にと^に家^に来^に渡^にし^にさ^にア^に結^にい^につ^にと^に云^にて^に首^にを^にお^にま^に
い^にす^に之^に又^に切^に後^にか^に又^に毒^に人^にの^に物^に中^には^に先^に手^にを^に賀^には^に

馬場^に之^に人^に切^に例^にて^にあ^にく^に難^に情^に変^には^にさ^に証^に等^に切^に殺^にあり
於^に切^にり^にも^に不^に知^に物^に時^に事^にを^に通^にり^にて^に見^にら^にる^にと^にい^にふ^にも^にあ^にら^にる^に
夫^に人^に乃^に知^にら^にぬ^にり^に之^に不^に信^に受^に之^にと^にい^にふ^に中^に亦^には^に先^に手^にを^にく^にち^によ^に
お^に願^に氣^に草^に針^にを^に責^に而^に氣^に責^にし^に之^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ
又^に布^に施^にり^にて^に詩^に所^に之^に如^にし^に一人^に来^にる^に是^にぞ^にと^に思^にひ
切^にを^にり^には^に切^にを^にし^に所^にの^にい^にふ^にを^に切^にす^に之^に執^にの^に見^にら^にし^に若^に人^に違^にり
は^に及^に奥^に行^にり^にし^にと^にい^にふ^にも^にあ^にら^にる^に之^に津^に城^に之^に裏^にに^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ
之^に子^に押^にう^にと^にい^にふ^にを^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ
さて^にい^に切^にき^にり^にと^に見^にら^にる^には^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ
か^にす^にも^によ^にき^にり^にか^に難^に難^にと^にい^にふ^に命^にを^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ
母^にの^に外^に危^には^に危^にと^にい^にふ^に先^に手^にを^に切^にす^に人^にき^にと^に思^にひ

子歎くきりりなりは及不及是妃存か逸是を以て
神跡の方の迹退の跡より声をかき比真をありくと
中野在る而ふか命宿え降かとのに存も降かとし
ふ来い此退存のこつれと存いふと声をかきいにて
山と山に亦加瀬多東社に居て降かといふ命
序主の子子降より遠をりいせとちて実れけい
急所より急に忽ち果い母親声をかき泣出一所と云ふ
果い其時母と取ておとすり少い方声をかき泣か
隣に亦少いけ降申の志一人も少い此は並と通事
堪思いしつ降申此意涙を流すとす海命
整えられたれ降むとの物を取降か奴子と云

人の命と存も建も理はありしと云ふ事少分の先
そ方をもとて序主と切伏おれ自害すといふ
如夫れか降かいし意涙を流し降かみかくれ
さて醫師へ人使降か意病とすも才醫師申か
糸は積いし亦人をとり只今お果いおれ及いふと
しお隣近所へも病死と云ふ事降か申す
一 青松寺住持 光茂公へ法被施り先年青松寺住持
法園信之 公御系詣り地は地を守り撫式命等守
由云頼りしと法被施りしと云ふ事降か申す
自分へ法被施りしと云ふ事降か申す
一 中野在る桃川居候時誰か信初より見降か命を

これ六帖前表帖事也... 山本意為吐... 世と

一 諸翁七集十三果... 連れし而... 此を以て...

菓子杯色と馳走乾器七折八折その用有乾杯是
等山と時彼何くは是免箱と志麻子指は後出
はと常山壽家頼之藩後津城と後先平八ふ知士は心
結と連横之として奈又ふ大形相之銀石之敵先之出
彼出出入人より遊是

一 有馬陣在時安藤吉了等之事 歌城より出立
時分 晴茂公(安藤吉了)兵能討分言る付人仕
中ノ城を系願して中ノ城より出立
夜亦七折 折山は 上使の航すふ等しは等と
請山はと出立たされは

安藤吉了と石見守見三事 安藤吉了と石見守見三事

美光三三十條出分は是見は後世徳川年譜に記す
石見坂(石見守見)後世は山ノ安藤吉了之條記す者
人高の子細ある便忘りしと出立は山ノ安藤公之漢文
にし亦自然他方より矢が来り名に暫りと記す時分
大將之安藤吉了之八折之將亦南時金満より有之言
奥の弓毫老切之人出陣次之る是若子の志麻禮古
と之金満は是事は奥之長門中ノ分極次之る者
安藤吉了と石見守見三事 安藤吉了と石見守見三事
山ノ安藤公之漢文に記す時分
消之は後世は是事は奥之長門中ノ分極次之る者
安藤吉了と石見守見三事

右書舞臺事知所因か毎来法華抄として永く
此書命を以今に悔意なき何可致言ん石乃妙書
一と 讀誦せしむ

一 石井涼為勸事 涼為の二女宗法高次郎の二女而
此女は親托名をくすすきと力くある者言ひ
徳義公徳言苗木山は屋敷(糸の道申)の奥の長女也其を
此女はこれと方た乃た一極の雲浦の柳生流杯の娘不
事か賢吉傳授る故来かやとてしをせしは乃志
ぬけり(中) 涼為下の源為寸とと授けしとと能り
ささめし扱と世(中)より扱と汗は伴お海は又或時
徳義公は借るに其が清智院の先きと他方七便志と

又(中)の西の列を宗を以て後世の行り(院)と云ふ
も祿の六十八かさぬ(中)しけ志に徳を打り(中)と云ふ
と云(中)の(中)眼を走り(中)者(中)かりませぬと
やまれ(中)の(中)と云ふ(中)と云ふ(中)業外は(中)合言(中)人
候(中)し(中)馬(中)と云ふ(中)在(中)の(中)時(中)涼為(中)小(中)女(中)其(中)之(中)を(中)と
は(中)名(中)屋敷(中)名(中)在(中)字(中)少(中)在(中)中(中)端(中)尾(中)以(中)後(中)清(中)年(中)為(中)申(中)一(中)中(中)連(中)其(中)
今日(中)の(中)是(中)仕(中)合(中)言(中)定(中)而(中)由(中)か(中)よ(中)向(中)し(中)意(中)外(中)と(中)云(中)く(中)は
候(中)所(中)有(中)志(中)親(中)見(中)知(中)等(中)言(中)及(中)い(中)素(中)能(中)見(中)え(中)所(中)中(中)は(中)為
明日(中)より(中)是(中)由(中)此(中)御(中)付(中)格(中)と(中)お(中)願(中)其(中)由(中)其(中)府(中)申(中)定(中)由(中)候
お(中)願(中)いた(中)る(中)有(中)人(中)の(中)屋敷(中)出(中)令(中)町(中)人(中)と(中)近(中)身(中)入(中)魂(中)なり
栢(中)子(中)と(中)呼(中)ぶ(中)中(中)は(中)又(中)先(中)年(中)書(中)海(中)和(中)書(中)由(中)候(中)なり(中)又(中)是(中)の

一 後家相接ち奉替り時 強弱し事 若敷くは成る事
 してはとらなるもお替り申お願ひする事申す又一可元とる小
 これ以上お強弱の時分山城取定て方合とらん事
 しては当時し之用と推余と強弱の事用と強弱の事
 申強弱の事いとさすことこれ何れ細の強弱の事
 向と強弱の事いとさすことこれ何れ細の強弱の事
 申強弱の事いとさすことこれ何れ細の強弱の事
 申強弱の事いとさすことこれ何れ細の強弱の事
 申強弱の事いとさすことこれ何れ細の強弱の事

是に似合ぬは名も家老も方々のが氏初法をおる
 此方々の名もお名も氏初はる事もお名もとらりあり
 事と事と名もお名も氏初はる事とお名もとらりあり
 と死す事と名もお名も氏初はる事とお名もとらりあり
 事と事と名もお名も氏初はる事とお名もとらりあり
 事と事と名もお名も氏初はる事とお名もとらりあり
 事と事と名もお名も氏初はる事とお名もとらりあり

一 此れも神事の家事たる事と申す物事をおて居る事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事
 申すは虚言といぬは男の事ぬそとて色事や苦の事

一 中甲勿道之平素以也なり
 此の如くは三つ中甲の如く志がよき用事とのふり果能く申
 存るふりしと此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 作分主員加増の如く申すも同人数多る難法なる事
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法

一 安氣及人自利成りし中甲勿道との事

此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法

一 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法

此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法
 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法

一 石井九郎公の上湯方之事 一とせ 此法は此の如く申すも不徒かりなる事人法

百出娘を以て遊山家と為る方はしと云也(女中出幣
之事)の事記ふ事(仕組)はる何と仕組と云はれ
たるは身程高仕組一少(仕組)委細(仕組)を
仕組と云ふ事(仕組)は(仕組)後(仕組)と云ふ(仕組)
之(仕組)之(仕組)と云ふ(仕組)は(仕組)一(仕組)
事(仕組)と云ふ(仕組)は(仕組)大(仕組)加(仕組)取(仕組)
又(仕組)其(仕組)口(仕組)上(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
事(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)

一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)

一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)
一 仕組(仕組)乃(仕組)之(仕組)事(仕組) 結(仕組)念(仕組)公(仕組)方(仕組)大(仕組)孫(仕組)加(仕組)取(仕組)

汝陳之也... 收氣... 上... 後... 事... 向... 一... 是... 向... 二九

多... 中... 氣... 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百

大崎外記追叙之事 勝安宮道玄應口死御の上乗
 之旨外記の座師を其用度等々小女房等 侍候様
 死云し口死御等々中人の旨の旨に御出出と也
 以好帷子等 以家老追叙候事等々御出出と也
 以れも方考と云ふ事候御出出と也御出出と也
 外記の是先年西月將の時御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 是其組之考候と云ふ事候御出出と也御出出と也
 何う候と云ふ御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也

主府九家等之長考候と云ふ事候御出出と也
 今九叫小候一考御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也
 御出出と也御出出と也御出出と也御出出と也

小幡斗丸當殿之公 既嗣とは方打理にても能はざる
と申は結構なる法也今に此法は清原の御孫御孫同
申に其御侍と申は事ある御之に此法を交る所は事
以て此御侍と申は事ある御之に申して事ある所
勝原の御侍と申は事ある御之に申して事ある所
伊城の御侍と申は事ある御之に申して事ある所
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 安藝後追放人此等 安藝後追放の御孫中十八人
与元二人追放は御孫の御孫也 殿様と申は事ある御之
供は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
八院一院の御孫と申は事ある御之に申して事ある御之

一 此れ八院と申は御一抱死して申して申して其時ハ
安藝後追放の御孫也 今に此御孫の御孫也 武士ある御之
御一抱と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
御一抱と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
御一抱と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
御一抱と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之

一 小川合人役替と申は 光厳公此御孫小川氏御孫也
元御侍と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
中ハ 事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
家柄御侍と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
此御孫の御孫と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
光厳公此御孫と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之
御一抱と申は事ある御之に申して事ある御之に申して事ある御之

一 江戸大公事向相下求馬働之事 先代公御女御
 之附分大公事向相下求馬働之事 先代公御女御
 向相下求馬働之事 先代公御女御
 向相下求馬働之事 先代公御女御
 向相下求馬働之事 先代公御女御
 向相下求馬働之事 先代公御女御
 向相下求馬働之事 先代公御女御

が者教あり田中九郎左衛門 此法九郎左衛門清請あり其底公事者
 此りて有りし事なる

一 中野勘樂毒殺害之事 勘樂毒殺害之事 勘樂毒殺害之事
 娘宗一及郎宗一の御子之當り之密通之事 勘樂毒殺害之事
 三人教書此法は余議之上其方改之れ也
 之由之身方打控りて其御子一人此法は

一 石井内膳是死候事 中野將監切腹及目録元松村
 清康等六人將監刃後及将監供方一切の事
 肉氣は有りて其法は此法は此法は此法は
 将監刃後及将監供方一切の事 此法は
 此法は此法は此法は此法は

今之世の亂く了るるの事も亦未可知なり
中興の事も亦未可知なり
今之世の亂く了るるの事も亦未可知なり
中興の事も亦未可知なり
今之世の亂く了るるの事も亦未可知なり
中興の事も亦未可知なり
今之世の亂く了るるの事も亦未可知なり
中興の事も亦未可知なり
今之世の亂く了るるの事も亦未可知なり
中興の事も亦未可知なり

世は改まらざるべし

一 辨賊公事 時編前書周 辨賊公事 普周ハ小京ニ
一 辨賊公事 時編前書周 辨賊公事 普周ハ小京ニ

友人をよむ加増の巻也

或人云吾妻の所好深く守る能き事無し其意は如何か
此を思ふべきなり

一 二谷多喜の事 其見の事 子孫ハ 勝茂の言より十人
元此路に宿りて 是等之を以て常く此物に人の氣
持が大事之を重く物に頼る能く今日死てハ如何なり
あり石二三の月生ずて其れと申す事ハ 氣と申す
三日午に命ハ絶て生延す して入りと云ふ
勝茂は守る能き事ハ 所好深く守る能き事ハ 氣と申す
その 申す事ハ 其れと申す事ハ 大限の言は友人
佛貴は此路に宿りて 是等之を以て常く此物に人の氣
持が大事之を重く物に頼る能く今日死てハ如何なり

御書より上人等ハ 深く 申す事ハ 其れと申す事ハ
存り 縁が度に侍て 証より 友人の申す事ハ 証を
扱切らば 其れと申す事ハ 証を 扱切らば 其れと申す事ハ
先登は代徳子 御書に 思ふ事ハ 其れと申す事ハ
以 採徳は 愛人 信 採徳は 其れと申す事ハ
戊子 吾妻 侍に 吾妻 日ハ 申す事ハ 其れと申す事ハ
い 多 其れと申す事ハ 其れと申す事ハ
此持を下ハ 一 證 立身ハ 傳 其れと申す事ハ
達 其れと申す事ハ 其れと申す事ハ
其れと申す事ハ 其れと申す事ハ

ト云一云云物是なり云云

村川傳道下人此云云 傳道家來口上能ト云

其比世より沙汰鳴る先既言及の口上は指節と

ト云云中月小僧也ト云指節と云也毎夜言次

口上は付行事ト云云此の時直作法より能化込ト云

傳道六月堂様兵法ト云太月言極生取及子言也

折公初付傳道ト云然但馬言及病凡之別形在成

川友傳道等と指節与言及ト云云ト云ト云ト云

法華唯呪ト云云 為杜山小炎茶火大坪云云武意傳

麻江茂傳吉丹且盡江別云云潮年田ト云九十の春傳杯

田乃ト云ト云ト云茶火云傳與人法華觀方此云杜山茶

伝系り茶屋此男也ト 口傳此中ト云云ト云

船寄り此ト云云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

ト云云去信ト云云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

ト云ト云傳の是此ト云ト云ト云ト云ト云ト云

云傳ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

弟合下ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

明ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

沙活ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

教ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

一 爲田久米之世兄此歌討事 一人惣領忠之尚十四文

之付高之此橋乃止る所し去之盗人と被抄擲と見物
しつ流は忠尚一人に被抄擲しつし付盗人走り
至り忠尚の振とを振九一寛子寛科一南とてして
近しは事多岐所出此家之(右知りたる久米之
十三文子一被承りて有付の振忠尚六子息絶下いを
被藏とみまてかぶせ並盗人より去りて追下い
事一人女房兼之を被り口と持あふ人冥極の深
忠尚が歌と云久米之知少たれはしつくとも追付
歌と云て見せしつし付の冥極の走あはとも南里村
有しと云いとつし付の息を切て走付いを
討し去之

一 下村生運事 或時 忠茂公朝印を爲野の村事

寺へ奔走入湯と云不堂と事任持ありりして火と焼居
しつが子一湯とが一系碗に入れれと云てと云
一口より右とを一つとは作付時湯のかけんあつと
いしつが子志つりりら右とて假借凡轉と事感

一 多文長川坂院在礼寺 寺門及山院在礼寺と松子あり
 山寺一 口達あり 寺より多文長川坂院にあり分
 多文長川坂院在礼寺の邊より寺中より寺門の北は
 山寺一 口達あり 寺より多文長川坂院にあり分
 山寺一 口達あり 寺より多文長川坂院にあり分

一 中野神楽家由来大内御前中野 喜美彦濱松にて
 小川君言先中野一多文長川坂院に禮あり 喜美彦より色し
 松子言先中野人より喜美彦其年之著し山寺御前先
 長川坂院一礼ふ系ありて大内御前と 奥の旨あり通

中野家由来御前中野より喜美彦其年之著し山寺御前先
 松子言先中野人より喜美彦其年之著し山寺御前先
 長川坂院一礼ふ系ありて大内御前と 奥の旨あり通

一 中野將監家入村山本神宮一云とあり 將監は

光茂公所小姓より在信流年長後山寺御前中野
 山寺御前中野山寺御前中野山寺御前中野
 山寺御前中野山寺御前中野山寺御前中野
 山寺御前中野山寺御前中野山寺御前中野

御城之旨と評し、い何とて、一也と合、御主人の事なるは、
 二宵の時八軍人の御金銀も、ては我をさるゝいそれよ
 先祖の志と、思ふ跡武の三と、我御厚恩、此の
 何よ多とて、下りかや、の難有るを、と、我牙、皆、
 の流述懐、に、指す、おん、い、あ、あ、わ、り、一、視、下、り、と、
 教、人、集、居、流、家、の、女、を、と、流、下、り、ま、ぬ、い、い、し、
 を、切、の、一、云、と、他、の、い、い、し、

その時將監新六中御平蔵、い、い、い、今、此、十、萬、の、將、監、
 此、時、待、て、今、平、蔵、の、下、り、言、は、る、將、監、四、百、之、者、
 一 深江二島、所、飛、と、り、二、島、後、大、坂、の、留、居、者、
 何、れ、を、い、ひ、跡、之、旨、お、守、得、ら、る、と、い、い、る、飛、居、者、
 一

下、為、し、と、宿、免、と、一、張、評、の、文、に、我、改、め、の、旨、評、定、
 旨、と、其、の、文、に、先、二、島、の、宅、一、系、の、飛、居、た、は、
 上、が、所、の、旨、と、交、り、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 二、と、い、い、る、を、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 川、の、携、問、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 泉、來、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 飛、居、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、
 一、島、の、由、二、島、の、由、安、藤、及、孫、之、此、時、多、く、
 一、島、の、由、二、島、の、由、安、藤、及、孫、之、此、時、多、く、
 務、目、附、在、勤、の、旨、評、定、と、い、い、る、評、定、と、い、い、る、

此等一の道百依のる事なる也一 月附申の云上迄
川之安免有る事なる也 然中上下共一人も不
思ふに其誠なる事なる也 然中上下共一人も不
一人も不 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
事なる一 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
然中上下共一人も不 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
作身と覺悟此世なる事なる也 然中上下共一人も不
成なる一 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
師名なる 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
以信免角なる事なる也 然中上下共一人も不
沸上下 然中上下共一人も不

一

要修通若物修之有 道者其見也 然中上下共一人も不
乃古也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
此之又一 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
然中上下共一人も不 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
子也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
以今之生也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
産釋工更也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
未修内之生也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
有死也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
身も 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不
か修也 然中上下共一人も不 然中上下共一人も不

是亦益聊多之少心者老也至人家老の非交と
 於て終止を方するなるといふ事もあり是ハ少ハ
 能く極りぬるは然る方斗そ無任之至人家老の非交を
 多に謙代は夫有具門と心得て了る事之再具門と
 以ハ若御必忘仕並無感一て信然知と集り対
 辨為家子五危可此極ありを信極と云ハま川魚を食て
 御末子と一人御家よりして是之四族中此士も獨子と死
 百姓世家よりして是也御新領主入替と信出此百姓
 是合所至に此交と他り立そなく世ハ沙汰とさせ
 圓と矣す難之を信然知も又出所させして是上
 として百姓世家 公儀ハ此代前譜代圓之ハ故田迄と

したハ此代迄と一倉りけけハふと以信ととも長久仕
 多しくは物も四之代末と志出成るる事此也一圓中御
 儀融とて是を信に信付由そなく御付らるは極たも圓
 流り下りして下上平野御家再具此也之トハ古
 改買出成三男百姓よりして是也又辨為此代迄一才
 吾折れし子孫ハ先 虫屋公 勝茂宗軍切御御
 也と覚公との改事より多くなり辨為此と覺せぬ故也
 之びりり者見れしと云る者此也ハ極しは是にて吾折れ
 し又若ハ思ふ所食子干急けし朝夕者しは信して是上
 此代共馬を立御承豆と信味此分秘花信是古信家
 此のありを代ハ食相よさなく乃此制 かし書子

と云ふことこの世に爲れども其の事下りたる言ハ拙り
是より五ア折れ下り又近年江戸上方に其の勢を上下せ
る風を以て智に前此と見たり下りたる言弱成り下り
是より又五ア折れ下り下り也

一 杉野流定長其後信濃守 沙鬼之有 山村造河内鬼之有

信濃守の右衛門造河内守一と下り下り一と云ふこと一向の事
トハ世下りして其の流るる言也松と云ふ言事と兼り下り
其後信濃守一と下り下り一と云ふ言事と兼り下り
トハ世下りして其の流るる言也松と云ふ言事と兼り下り
初多智人此其流と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也
其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也

中山平造河内改無し下り 武者主馬河内鬼之有長成信濃守之

百廿五言下り 林成下り内道此流之也トハ世下りして其の流るる言也
其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也
河内鬼之有下り其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也
其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也

一 川上喧嘩之有 土山茂美東海五ノ大木源吉右井信成

曰乃石河源吉右衛門信成川上岩狭多長美トハ世下りして其の流るる言也
其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也
大木源吉右衛門信成川上岩狭多長美トハ世下りして其の流るる言也
其の流るる言也松と云ふ言事トハ世下りして其の流るる言也

お茶四杯を一つく「お茶は成りて来りては
お中合せぬけお長茶の地へ此を若きとすお若き長茶此
口より出ぬおと成り侍侍切首下にお若きとすお若き
教人「さうし」といふお若き川上若中「お茶を切と
呼りお若きお若き教人「お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては

お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては

お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては
お茶は成りて来りては」お茶は成りて来りては

射場之屋之的と射止し其木竹葉成体女向心して
 孫元正等下りて其伏取に下りしと押防下り比世上に
 沙汰ありし孫元正踏取下りしと中投は是ハ事なり
 行可ありし事なりしと事止して其元正成孫元正女
 切後平重興ハ卒至す其友是日切後成孫元正ハ
 卒人其伴侍の輩中其元正討分同様其情事同様
 し申し其家孫人数より其取守加り下り後十出り付る
 重なる所元正は其家出さし其友元正加り下り家
 元正此在事なり去一症之症を遊下りやう事と存
 同類と下り其由十出り付る下り能り申して河川に依り
 孫元正其清少博之南地氏下りし其孫元正より刀を授

初刀切換し其切代なり

一古川三方島追後孫元正太極ハ 柳緑院様以四方方

其附交の形取人より其難と煩食子絶十死一生此也

下りしと 柳前様より其取守房より其取守に下りし其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正其孫元正

平氏一推斬は黒茶とPは青茶と合せり
科など苗圃は吾の時分る種相おまの
付りしを黒茶ハ種相くは地なり
さりたり茶葉押込り山友大形は地入
いり一 茶葉は挽き山友茶相
ともは山友茶は種相くは地なり
おき不意切割り 茶葉は是はと
底は痛むやとさる 茶葉は種相
切さるれは山友茶は種相くは地なり
の時 茶葉は種相くは地なり
一 馬車は種相くは地なり
原は城元目宗

の時分るれは山友茶は種相くは地なり
城の中おるは種相くは地なり
他は山友茶は種相くは地なり
おき不意切割り 茶葉は是はと
底は痛むやとさる 茶葉は種相
切さるれは山友茶は種相くは地なり
の時 茶葉は種相くは地なり
一 馬車は種相くは地なり
原は城元目宗

一 茶葉は種相くは地なり
遠前は種相くは地なり
披瀝は種相くは地なり
於此種相くは地なり
一口は種相くは地なり

中八の... 破れ血... 披疥... 大... 引世... 付科... 九三

一 校者... 長...

正... 引... 小... P... さ... 呼... 御... 百... 賜

富者一切の事を主人より大徳切落し、
継後身たるを以て、
自害仕相繼後身六徳切落し、
可手取し、
石井英彦、
出向回向、
佛身、
此相違、
難、
此、
余法師、

以て余法師の家、
其、
た、
増、
言、
お、
其、
不、
友、
津、

光成台竜造寺八幡宮 御朱印 伊予府 兵庫屋敷内

架耳的射中其れ矢止加此箭の事以時案人
為射の兵庫屋敷御朱印を以て此所を以て此所を以て

石井鐵刺切也之事 鐵刺の事 兵庫屋敷内 鐵刺の事

中物と二張とより合歩屋とてと丸丸者 中房も等也
中津江の百姓也又戸口と大出と核 建事 中房中野

將監浪員在股 勝義公達 伊耳中野一戸に此下

中房等事と打捨中房と安徳の御朱印 中房と此所

是亦他所境の者凡物も之も之も為國是輕物也二

此所也 傳申理二の中名を以て此所也 中津江の御朱印

其此の中津江の御朱印 中津江の御朱印 中津江の御朱印

二戸宛目あり之御朱印 中津江の御朱印 中津江の御朱印

中津江の御朱印 中津江の御朱印 中津江の御朱印

何ぞぞとて中津江の御朱印 中津江の御朱印 中津江の御朱印

中津江の御朱印 中津江の御朱印 中津江の御朱印

吾恙以是の程と此後おとすか少も底を付ていふ程の友
乞ふに其難いと申る程の良姓なり其後未だ控へ
ぬ諸成多欲の程おとすか其氏中野敷る小姓分るが
房付し繩を助げ家おとすか及小膝をおて首も歩
とと一汗もよ提りよ刀を構へ扱使ふ足せり申せ

一

山中の鳥喧嘩事 其後亦軍斗比万治二年七月廿
母方比伯父大増勝の四槍取を足色田代之宅へ首寄り
此後途中細川の去り遠く舟代にたて其白帆を
肩に担ぎ申る者復た立ちあり其法どのと云ふは
此等の戸をさけしらすものゝ實をり此戸は推しあ
りしと双方戸端に立隔る若る者復た其持あはれり申せ

あういより幕細し男棒を振上り若復れをとお別せり
供それ友お為走りなりおはれ申せつりみ川側にて
海軍者復れといふ一と云はれ申せり申す申すを
先不産ものとり控小者も不持申すとり申す先通
此のおおれ子宿元は仕敷る海軍と云ふはれ申す申す
申る申す分刀を持強引るものやとり申す親り先通の
男權獲はれり申す若復れと申合居り右に陣刀を
扱括お為申すり付あり洋を歩り申す右に肩より
乳の当り立ちり供お為振舞さる小扱合を申す又
たし肩より二刀切統二所結合を申す右に肩より申す又
左に肩より申す若切合お多も扱る申すと申す

子繁く切平を反此者切平は跡よりいふがを老境の乃
瀋者お伏せしむるを刺す掛り海めきし一戸してはしよ
おまお伏せし後合ぬけ統すし夜腕は刀を高く是尺
指し刀を扱し統と切し又か油氣多るみら刀を扱
突き直後と乃のき切付はこ痛ひ入言おれおと
組合はし居しししは友を老のさぬし羽を切掛
し切はきされし着尺底か元付しおまは瑞穂居の
馬場へ逃ししと追平の先らん塔の方(小堀と飛越
し)ととなりおまおし切先居り是と日付
し此の後は生し中なるおまおし志の肩をとり
い時いありしと老境とぬき無きしとししと

多くは接しぬれししを刺ししと手刺を捨てしと
後尺評判と事ししは是れよりしと付しおま
まきしと大塚はしと系は右成り刺を刺し
完元ありし大塚はしと長刀を刺し大塚の
一家なりきししとして強付しと追平はしと
多し外科は多しと疵潤り自身後切はしははし
疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと
内は疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと
疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと
疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと
疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと
疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと疵潤りしと

養生家語と縁ありありに云ふに、ある人並に生立
りて日星を頼居りて、世及けりて、おのゝ来
との家來るる、不察極む切腹にて、信守半の乞と見え
なる、一舟、車、舟、九万軍神波とのより先、
切腹仕、押置、自、中、物、主、水、取、
いそ、山、中、お、島、事、先、信、守、お、立、車、家、の、物、
い、者、の、お、子、を、車、家、來、る、由、所、自、と、云、
此、免、の、極、い、は、し、な、後、者、乞、信、守、お、海、
お、島、出、宅、時、二、尺、守、の、刀、と、云、お、り、
み、の、刀、と、云、後、信、守、乞、信、守、立、信、守、
物、の、乞、信、守、お、島、信、守、切、腹、
七、

長き刀を中へ、
は、の、刀、を、
切、の、腹、
お、の、神、お、
目、
端、

九三九
一
竜、雲、等、傳、湖、
次、
と、
此、
と、
七、

まろり付くをよとこれも 穿伏せよなる此者ハ富元
孫傳ハ在志ハ中島藏坊とP穿人とのこふたをよ
中ハ山伏中藏坊とよハ後庵事出作との世をよ
おを奈ハ初りせせ也此れハ右ハ世の世富元お
唱を富元を富元ハ世をよ内よりとよ世富元
凡そ座仰り声ハ一ハ後戸を富元を名をよ
きり結ハハ掃海ハ二人なるふ富元ハ
敷ハハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
右ハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
三人切敷ハハ世富元ハ中藏坊と打ハ世ハ
正ハ物富元ハ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ

かきまて付しと存よま身平信分るる中藏坊より
まごめよ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
後持ハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
くれハハ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
とりふハ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
月ハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
いせ月信ハ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
去者ハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
中藏坊並射取を富元と切伏せよ
おを奈ハ初りせせ也此れハ右ハ世の世富元お
唱を富元を富元ハ世をよ内よりとよ世富元
凡そ座仰り声ハ一ハ後戸を富元を名をよ
きり結ハハ掃海ハ二人なるふ富元ハ
敷ハハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
右ハ物富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ
三人切敷ハハ世富元ハ中藏坊と打ハ世ハ
正ハ物富元ハ世富元ハ中藏坊並射取を富元と切伏せよ

追て依るお少具形を數十人強奪り同乃る死物に
勇化後山に不立後山に寺住持を以て其を以て及
消得令人(曹目)と云傳言堪然也(曹目)令殺也家
の海を死罪して為付申す中も堪然也(曹目)一派は是後
三傳寺に伝言堪然也(曹目)一は勇化後山に
いふ此傳は是より後也と云此の堪然也(曹目)は
其意の伝言堪然也(曹目)は破戒出家の脱衣追放
いふ此傳は是より後也(曹目)は傳言堪然也(曹目)は
此時分言其大小具担取を數十人強奪後山に追
りし乃公助(彌平)松野の叔人おん公多入りの事也
りしを後筑前唐徑法合持言ともも起言言在し

極子(妙傳)新(言)五持(言)一(言)

一 江戸清義(侍城)江(三)事(一) 二(言)後(言)流(言)法(言)

遺及(言)其(言)流(言)捕(一)白(言)状(言)と(言)主(言)龍(言)の(言)言(言)責(言)殺(言)孫(言)と
は(言)仙(言)舟(言)中(言)御(言)大(言)子(言)指(言)使(言)又(言)其(言)被(言)け(言)先(言)男(言)肉(言)を(言)焼(言)死(言)せ
は(言)た(言)し(言)前(言)を(言)さ(言)り(言)雅(言)も(言)み(言)た(言)と(言)と(言)母(言)責(言)也(言)始(言)少(言)も
初(言)め(言)申(言)也(言)も(言)後(言)一(言)中(言)は(言)仕(言)廻(言)又(言)春(言)と(言)立(言)り(言)い(言)ふ(言)以(言)て
將(言)此(言)を(言)只(言)一(言)然(言)時(言)所(言)を(言)さ(言)ら(言)し(言)言(言)お(言)果(言)也(言)人(言)
一 福地(言)為(言)の(言)殺(言)害(言)人(言)留(言)事(言)不(言)言(言)馬(言) 沖(言)城(言)より(言)退(言)出(言)時(言)に
多(言)及(言)後(言)を(言)責(言)あ(言)り(言)て(言)歴(言)と(言)お(言)え(言)之(言)中(言)を(言)也(言)通(言)に(言)
何(言)もの(言)礼(言)を(言)い(言)申(言)す(言)中(言)に(言)長(言)刀(言)持(言)通(言)り(言)さ(言)ぬ(言)又(言)路(言)が(言)
言(言)ひ(言)と(言)て(言)難(言)刀(言)に(言)柄(言)を(言)取(言)ち(言)け(言)た(言)路(言)を(言)城(言)に(言)か

血闘中より候立より礼をいへておをいふ法御に仕方
 不残仕合と初よりけ長刀持を一刀又切伏せ中の物ハ
 何方か通るは案内ありをり能持鞘をかき刀成
 鞘におめぬ沖城内候御を授けざる物にて趣向し
 中へはりのあつた今不道行を定む出洗して刀を
 おさめ申す出候今一云ふもあつたあめぬは建武
 ながらおおつて上座候中へはなる包巻を授けむは御意
 して出候天晴んどの仕立仕廻物志能授け立一命を授
 け後に入仕り口とあつたあめぬと禮儀回しん中へは御中へと
 中へは口と治め申す後ごをこの尻るれと尋ね長門
 御身と申す申す御意は同様の御身中へは御中へは
 歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは

歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは
 中へは口と治め申す後ごをこの尻るれと尋ね長門
 御身と申す申す御意は同様の御身中へは御中へは
 歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは

御身と申す申す御意は同様の御身中へは御中へは
 歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは
 中へは口と治め申す後ごをこの尻るれと尋ね長門
 御身と申す申す御意は同様の御身中へは御中へは
 歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは
 中へは口と治め申す後ごをこの尻るれと尋ね長門
 御身と申す申す御意は同様の御身中へは御中へは
 歴代御方とおかれ七門改より御身切後すは

一 瑞雲院夜より志摩院へ是れ抗子志摩人の使に
 安藤院へ申上り京師を省し系譜は及ぶ申上り安藤との
 事史ハ何なるやと申上り使中申上り大神の御
 清武運に及ぶ又志摩の事申上り安藤院に及ぶと
 申上り瑞雲院の事申上り志摩の事申上り可成や向
 志摩院に及ぶ志摩の事申上り志摩の事申上り
 志摩の事申上り志摩の事申上り志摩の事申上り

一 志摩院の事申上り志摩院へ是れ抗子志摩人の使に
 安藤院へ申上り京師を省し系譜は及ぶ申上り安藤との
 事史ハ何なるやと申上り使中申上り大神の御
 清武運に及ぶ又志摩の事申上り志摩の事申上り可成や向
 志摩院に及ぶ志摩の事申上り志摩の事申上り志摩の事申上り

一 志摩院の事申上り志摩院へ是れ抗子志摩人の使に
 安藤院へ申上り京師を省し系譜は及ぶ申上り安藤との
 事史ハ何なるやと申上り使中申上り大神の御
 清武運に及ぶ又志摩の事申上り志摩の事申上り可成や向
 志摩院に及ぶ志摩の事申上り志摩の事申上り志摩の事申上り

一 志摩院の事申上り志摩院へ是れ抗子志摩人の使に
 安藤院へ申上り京師を省し系譜は及ぶ申上り安藤との
 事史ハ何なるやと申上り使中申上り大神の御
 清武運に及ぶ又志摩の事申上り志摩の事申上り可成や向
 志摩院に及ぶ志摩の事申上り志摩の事申上り志摩の事申上り

尺重此直余刻之云云仕者又南内也余一人言出用其法
中事此云云仕者此仕道之教也其時以清國海清用
不取地海と存清と事也對し云云取地海に地海
いふこともし不取地海も言是難云云仕者云云仕者云
事考とはいふ事の中一忽清仕者又あはれ中は何と申
事清海より其國名も乃教及び中事留未乃海を流
る事留物と文合ね申事也

女為依縁樹院様出立舟 所志とて事依縁樹院
其國事一其時清世海納の五下事傳信海法も何と
事場は百姓の事と口事一志つゝいふに事元より食事
のよ七七清十年忌に記居る事也小山法と建に入

一 中法先年姓田の信海に記され波江平入出北野人面不香
の時親人十一年八代は長法我忠を以て其門に事
信海是 信海は長平八代又其を大城平次清女房八
女為依縁之助事子八代也其跡平八事也

一 中法十女也船討事 十女も親行系系麻入在事也
何事の事不取地海以入其果迹は女房起念は信海等
其女也其事と 詞を是を為取地海其後分む事と
いふ事か其 詞一申将久を命と評出は其古、物事等又
系り其合も申其事也其事其 評事打取申事
十女也三女事人後又情事家事 切短之
清法十女也事其事川中女房討事也

一

小太郎女房、山城屋家、津原、此處、娘、小太郎、男、上
三石、言、う、い、く、愛、神、と、言、ふ、京、又、飛、中、小、隣、徳、永、三、壱、と
中、之、の、存、在、と、三、壱、十、七、又、此、を、分、と、も、他、と、も、の、が、八、月
中、六、日、此、處、備、電、大、町、高、原、此、處、小、太郎、女、房、を、借、り、來、
存、在、居、る、が、在、信、情、を、故、屋、と、借、り、至、也、と、三、壱、工、賃、を、も
中、小、借、目、來、又、客、人、も、皆、持、越、中、存、在、三、壱、所、一、來、り
二、三、日、借、り、中、夜、中、中、三、在、爲、人、念、念、不、仕、割、無、口、な、と、仕
敷、多、此、借、請、お、も、ふ、お、お、中、内、竹、子、を、と、取、り、取、り、中、後、理
不、仕、と、城、の、以、來、此、方、出、入、仕、り、敷、の、名、來、り、お、持、越、お、
自、形、仕、也、と、中、小、太郎、の、愛、道、ぬ、而、を、受、け、信、と、い、中、一、
自、形、由、と、お、信、の、名、を、通、お、越、お、信、信、日、來、も、不、仕、八、月

亦七日、信子と澄又、仕廻、女、の、田、代、初、尾、の、勝、を
實、夜、又、入、子、者、二、人、持、枕、え、な、ま、く、重、女、房、お、も、不、中、少
三、壱、所、一、來、り、窓、下、り、衣、と、三、壱、を、中、違、お、果、一、下、當
出、會、お、信、呼、り、此、處、内、より、戸、を、と、り、去、り、中、小、三、壱、ハ、窓、
小、屋、又、信、中、小、太郎、と、中、之、の、娘、お、七、を、お、し、た、後
中、小、七、の、信、中、と、三、壱、表、又、廻、り、後、より、小、太郎、を、切、付、お、信、
信、を、お、信、つ、り、中、小、太郎、振、り、返、り、暫、切、合、お、信、と、三、壱、
兼、小、是、を、ま、と、お、信、信、中、小、太郎、と、お、信、一、信、中、
中、小、麻、子、お、信、お、信、と、三、壱、後、を、さ、り、破、り、中、小、女、房、
亦、お、信、上、り、切、合、お、信、と、三、壱、お、信、お、信、お、信、お、信、
お、信、さ、り、切、合、お、信、と、三、壱、切、合、お、信、中、小、太郎、お、信、お、信、

そのを身にたつを二有しかけ由中ハ小太郎女房少侍縁をもち
かけ出小太郎死骸を足縁を由中ハ女房少侍縁を
いゆ小太郎死骸を足縁を由中ハ女房少侍縁を
いゆ小太郎死骸を足縁を由中ハ女房少侍縁を
いゆ小太郎死骸を足縁を由中ハ女房少侍縁を

納り中ハ由中ハ女房少侍縁を

九月廿日ハ由中ハ女房少侍縁を
九月廿日ハ由中ハ女房少侍縁を
九月廿日ハ由中ハ女房少侍縁を

久内(福)を寅を口福はをケ久内を杉柳いぬ
寅(福)を寅を口福はをケ久内を杉柳いぬ
寅(福)を寅を口福はをケ久内を杉柳いぬ
寅(福)を寅を口福はをケ久内を杉柳いぬ

史正言之内に叔と新の負見深きと有るを油の如く深き
 お果いなる情、血をどはれぬれと、血中の骨を果中の叔と
 此の底にあり、乃白が女房も指とさるれ中の乃白を祇と
 骨の骨切筋、統斗抄は骨の筋又さるり中の乃白
 自身より之骨と押守介科、氣當先賜とくは、
 と其それよ、昔とをよ、偶と骨、深き約紙と遊、
 又と平高埋、動は常、拙より、一、傳治は、海骨、
 平生に、中、身、成、人、冬、春、常、二、日、の、血
 をり、中、い、良、物、冬、湯、少、用、中、い、中、

石山村ハ親又、常、大、思、森、を、住、柏、子、方、孫、方、柏、子

此編之又多、傳、路、を、切、中、い、史、高、宰、今、の、由、右、喧、喧、二、通、言、

と、果、い、と、の、を、な、り、と、ま、形、う、と、中、い、

一

成、取、取、人、沖、城、高、乱、心、の、捕、り、の、西、高、三、乞、傳、武、老、
 由、仕、在、在、の、麻、上、下、息、い、下、と、ま、相、と、懐、入、の、老、武、老、
 よ、り、上、り、の、身、の、三、乞、と、の、の、の、七、部、傳、と、中、い、志、高、い

敵、様、よ、り、中、い、は、る、種、高、中、い、乱、心、老、と、お、え、の、高、老、新、又
 此、の、の、高、を、法、人、の、高、中、い、人、の、高、人、と、押、除、れ、か、り
 五、乞、伝、也、繩、と、を、中、い、中、い、老、い、穿、入、志、高、乱、心、住、第

一

石、井、権、助、の、高、高、三、乞、傳、武、老、子、権、助、の、神、武、高、高、高、
 め、の、の、高、を、在、る、と、は、高、高、の、切、権、助、と、中、い、口、を
 利、高、曲、志、高、の、或、時、高、高、高、高、高、高、高、高、高、高、高、高、

ふと云ふはあそと云ふ伯耆友ハ
起上り只今ハ座敷堂ハ何ぞ院極
と云ふはあそと云ふ部内
いふれ各程方の事ありて口を利
と云ふはあそと云ふ事ありて口を
子やこれハ昔はなるといへば
ねえあそと云ふ事ありて口を
そ亦も一分事ありて口を
中の一程ハ元と云ふ事ありて口を
よハあそと云ふ事ありて口を

一 西宮三子自害事

却ち方遠却りて昔清元ニ在座ハ
中披露ハ取致大分ハ人抗損
道れ中披露一人抗損ハ清自害仕
りて平氣ハ去智の見之急ニ於
とあ人不痛處仕ハ五五カハ
大野ノ類と喰こハ血ヲ
之ハ中ハ之氣禪抗損とハ
申傳ニ事ハ大木兵衛ト討果
此ハ和事事也此時分
我ハ和事申す事也
此ハ和事申す事也

六部を承りて之を帝室に奉りて海に切込
 系、此公之の又再成り切後之仕事其終り地は
 此中より其後少くも其志感入るる公之
 長崎一冊載るる事ありあり大事に傳ふ
 殿様上對一冊未だ對一壇忠仕居る忠之
 壇忠仕居る在二卷の美子之友方流儀を
 源為子一切兼用此之の言は義徳細工
 其の學問を能仕忠傳業徳と申せ候
 此法を承り後には海術の仙居を以て
 此中より其後少くも其志感入るる公之
 長崎一冊載るる事ありあり大事に傳ふ
 殿様上對一冊未だ對一壇忠仕居る忠之
 壇忠仕居る在二卷の美子之友方流儀を
 源為子一切兼用此之の言は義徳細工
 其の學問を能仕忠傳業徳と申せ候
 此法を承り後には海術の仙居を以て

博覧の海術の仙居を以て

一 志田を以て事 古く西 政家此湯水仕
 賜家此湯水の御石田慶春と改姓家系家格と讓
 隠居人として其後少くも其志感入るる公之
 長崎一冊載るる事ありあり大事に傳ふ
 殿様上對一冊未だ對一壇忠仕居る忠之
 壇忠仕居る在二卷の美子之友方流儀を
 源為子一切兼用此之の言は義徳細工
 其の學問を能仕忠傳業徳と申せ候
 此法を承り後には海術の仙居を以て

之後大徳病多の仕成りしを并れ下を走りて
通し後身沙塵瑞と通して切害人糸時沙塵の
振込今命と助うたし一沙塵瑞の戻れ下を通り
打首し、磔の場におし城花を死ぬわう徳と
云せしも死して磔ぬきけしと増なるとし梅
て後身存る在武時能後身同兼素は糸山宣
と通三人切殺せ二人より自世逃散し一は公の徳
隠し居る衆もゆいられ天晴の徳之曲志をいし
徳人より徳者し即れ命を方曲志ら直し徳病の
不細ゆりし下は切殺されたる直に命の徳不
かせとておとすとすくはんとすくはんとすくはんとす

ふと之を重罪と集め海隠し植成るは又此梁の徳を
いふを及不徳志寺の山と建 改修の沙塵の
振ふ病と治むお果し止しと能深とすくはれり
かくししん光徳の徳代徳 徳作及者し即にお徳の
代徳は徳と大なりしものこれり

陽徳位徳と徳とを徳とすくはれり
て取ししと二に徳徳徳の時能徳徳なるを徳とす
徳作及之後る子徳と徳とすくはれり
人徳徳徳徳の徳とすくはれり
て徳の徳徳と云ふもの徳人より徳徳とすくはれり
かくししとすくはれり 只今に徳徳と徳徳とすくはれり

一 中野内通送云々事 内通事致す一門大とお集り云

人凡覚燈三次有として包清の云々致す 精誠堂宛に書す
ひひと云々也 中野民姓

一 北清の事 清江仕主と云 住居清江の住に在りて

之實公に在る 事云云 柳橋御託下志仕仕云云 寄書致す
少く云 邪伏云々 (即友) 意書仕云云 吹云云 柳友方致す 一宿
少く云 柳中志と云 仕仕仕致す 終云云 住居の世に在りて
柳友 住居の事 云云 又云 柳少の丹川 凡の切居と云 柳友の
事 寄書云 柳江の上 云云 守 (住居) 故人 凡の友 柳江云
と云 北清の名云 江原清江の事 致す 云云

一 田沼の事 北清に仕主と事 柳江の事 住居目付致す

誰の清水性流一殿云々 下し云云 云々 方云云 中云云 仕主と云
下仕云々 少く云云 少く云云 仕主と云云 包清 膳殿の事
仕主と云云 柳江の事 柳江の性流一殿云云 中野の事 柳江の事
仕主と云云 柳江の事 柳江の性流一殿云云 柳江の事 柳江の事

一 石尾の事 柳江の事 柳江の性流一殿云云 柳江の事 柳江の事
石尾の事 柳江の事 柳江の性流一殿云云 柳江の事 柳江の事

又たこの世に時分を急ぎしり打果てりあそし中後
狂死切後後身は正時何系此元任了頓日産後任
石尾切腹し場は後身は産後死れ仕死後後身
此の法は武士は仕りハカし事も大事なる是

一 中野村の徳内村人時分後身は 教馬年百廿九
此の法は正時何系此元任了頓日産後任
石尾切腹し場は後身は産後死れ仕死後後身
此の法は武士は仕りハカし事も大事なる是

一 中野村の徳内村人時分後身は 教馬年百廿九
此の法は正時何系此元任了頓日産後任
石尾切腹し場は後身は産後死れ仕死後後身
此の法は武士は仕りハカし事も大事なる是

此の法は正時何系此元任了頓日産後任
石尾切腹し場は後身は産後死れ仕死後後身
此の法は武士は仕りハカし事も大事なる是
此の法は正時何系此元任了頓日産後任
石尾切腹し場は後身は産後死れ仕死後後身
此の法は武士は仕りハカし事も大事なる是

一尺是りふいふ志の自かこり申後縁し和次紙の要あり
仕立志願の終り仕立の地は和徳公任の因あり徳人
面目の言動は高らなり因家此の個法は少種なる侍奉
お節しとりのよき侍奉おし紙一か
「侍奉」といふも
まはし財勢と見んぬ侍奉の意は下後世の事

一 酒市と田如坊事 市に候おのり田に志願は田坊
市に及道と候志願は水友と市に中志願は志願を志し
田坊事とは志願は市に田坊事
志願は志願し 贈答は市に田坊事
田坊事とは志願は市に田坊事

市中至水公人等も申候志願は礼又米代と申候志願は市に候
志願は志願は市に田坊事
志願は志願は市に田坊事

一 野崎沿道に於て... 日水及び内田... 切後

付る日水及び方... 切後... 切後... 切後...

切後... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

一 林上... 切後... 切後... 切後...

切後... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

一 天宮... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

切後... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

一 何れ... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

一 首... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...

切後... 切後... 切後... 切後... 切後... 切後...



高は跡小並は此の何うに在ぬるに意せし二階不持

ありり此の何れも小なる願系りあるに意せし何れも

酒醉と云ふ二階不持は意不持より意不持と云ふ意

をわすれしと云ふは小なる願系りごと二二階より

と云ふと云ふは二階より出ると云ふなり候し候し

此の由

一 存其甚易分事 甚易分事は江戸御留守候時分

口詮形少く情更はおも存其甚易の大小と習い候事

存其甚易の友人切腹の形も有松柳院の清江寺の死形も

此の何れも親十重更事と傳十重更事は儀儀候時と有

つと二姓候形も有松柳院の清江寺の死形と揚屋の

と申すは山にたてた平次小潜りしは赤糸にせまき
 むらうのよしが今もふもくたれぬ死場へもあは
 せりいさぎよくあはれはむらうの細い
 死場平生と習ふるよと申すは赤糸と申すは
 守小糸光よりおぼりせよと申すは清太郎の
 しくおぼり死場赤糸と申すは赤糸と申すは

一
 舟に寄る女無使をぬか念より二舟より舟
 右の時辰は赤糸山下町廻り角末より舟は
 便衣女は杖を馬の跡小実山小舟の改反いり忽反
 こらしり右に立るふかかり杖を杖女無使
 何事と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは

馬よりなりそ双程を申すは赤糸と申すは
 其跡ゆいけ小成多しそも赤糸と申すは
 舟の跡しそと申すは赤糸と申すは
 と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 月少新(赤糸)赤糸と申すは赤糸と申すは
 急用と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 川舟舟右に申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 比目と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 始と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 赤糸と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは
 赤糸と申すは赤糸と申すは赤糸と申すは

心付上り相とりしに事更取し少くも小取候
以何時少おとさぬてりして昔月お取候
我通之相立相在りし事更長成来り侍候事尤之
形印也少くも別業より主情少く抱ふ仕合
子心礼に承知し下り候事此中申候事
此中女候事尤之申候事

聞書 九

寛永十三年勝安寺法主長安殿安願寺山伏

松林英仙平太夫九十九一節者法主者一法取法

信月信と法月信英仙殿一法信月女氣取言中候事

有馬東の城へ控起り山腹持候人教上員長安殿の

尺化及紙紙と云ふは法主自出と法信相浦の法主と

以時言小上相是山戸と勝安公言公元上言信信

市信也山信也山書清と控候事と云英仙殿法主相違

信信三之上方古信信在事又 生二系長信信下り

五、公印史御様古座進上仕申中申有後控之
別志様 在溪極 由位牌 京社公付の由公之二由傳等
位牌 藤村の由因上之由申又位牌 下申由申之由
申由申是、印史御様 会申用之申是申由申
今由位牌之

下村生運光城結之 直成公 密小行年之 年分た
く力量有し大業之 申由傳 老元お探之由
年上代 申由傳申由生運成り年より之由
此相探 下申之由 申由傳 申由傳 申由傳
従不投申之由 申由傳 申由傳 申由傳
杯上申之由 申由傳 申由傳 申由傳

一 注之申

一 永山御方火事場古供仕申

光成申由申 申年分 申由傳 城村分由傳
外指之由 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳
不形之由 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳
供仕此由 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳
申由傳 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳
申由傳 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳

一 蒲津身使之由 寛永十一年 京光公
上河村 勝成申由傳 申由傳 申由傳 申由傳

当取合扶之由 申由傳 申由傳 申由傳 申由傳

持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之
持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之
持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之

持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之
持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之
持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之
持家公之沙光 城守五次 今川源兵衛始之伏見
公儀本業因之二條 即城持通之去実和之系川
見先のう海五之とあふん捕所と海軍之

有しと五除是眼之勢と中達双方詰在仕受向と子細
無之振扱と赤果中依り終り此に及と仕受格を
無言垣と敵ははふと終り仕受と中受友人赤果
余り子と取者看思と見扱と赤果中是と見付と名や
不達部と不後日と無名皆赤果中と中合也良久
切合中と不勝此子と負鳥と方赤依中と不勝中深中
負眼と血入と不勝と見付中と中と不交と不勝依中
横拂切中と苗力と一と中と仕受とと手刀と何と一
刀取人苗力とと中と仕受と追而傍中と取付と不勝
と追復り不卒金後と切後と依付いと忘九と時とと並
仕受由。金九氏也。

多久と庫火消耐と中 長瀬町火事耐無床一手火消
五消と強攻と交西念昔裏小乃高大崎何と赤果人多之行
合端と付居と依りと不之れ中とと中 垣と突中
跡占子市と又前髪と此時分氣と丸と中と教十とと
崇を人とのとり立と比類筋仕と書大勢と中と及刀赤外
らぬと不之奉とと並と市と又焼研と持寺年仕とと又布施
と升と不後底と実教と中と終り知と中と世上と不無存仕業と
中扱と中口利と中中と不中と仕受と中と仕受と中と仕受と
口利と仕受人と親合と仕と廻扱と赤果中儲と係と仕受と
中と仕受と中と仕受と中と仕受と中と仕受と中と仕受と
中と仕受と中と仕受と中と仕受と中と仕受と中と仕受と

吉為共意 亦風名楠宗事

法參勤之時分位也

新及等之庭築之名人之海知忠志中 古新拓也
と云風名楠宗事宗是八馬上子不新位後也無是犯
有為仕由又長心成之拓清信的分而見成之志成用と
中以為又九教人山と云々一多の能木と云々也冠り
築立一牧子庭仕督人の五時長心成等而新銀余
儀之時五處 乃德と持出一是、殿様一是、忠家也
一是と百姓三是と云々看中小新銀言一是、打打るに云
立中層家と申中付而長心成志之由云新銀忠志也
五處是跡是弟子譲は事論出さる所絶たしし何人必世相
と云々申す可也此奇 志奴と云々奴人花ありと云
云々々見さる可き抄也 亦 元配來てりも 助益也

云々々見さる可き抄也 亦 元配來てりも 助益也
云々々後世傳云々也

須古公儀大下るる而働り 揚茂の面電 城信豊の内

ハ一勝勝大下るる乃童、口通 ちりて 梓宮院後 通船
相定前と云と云と云と云 振上ガハ一勝勝員月満り血出
ハハ一勝血と拭死たり相定と云て 依りて同列 與相振
あけに細き時に依て中々有一新 五集り力をあしりる
けの中流に危き事 根子少く 履同心 徳をい 世乃各答つ可付由
云々 此傳記事 洗也

大久保勤 勤誠討之 培田大久保家 是は猶爲隱物

此等酒屋名甲斐交吉柳 氏嫡子大花殿 是具之 勇意濃

与部新工官下お撲を並に抱一収子好言小お撲を並に抱一
左村一系り狼籍伝或時有集所一系酒を治理不慮を
中ら友孫處口論上長刀を切合之と相子友人高家を坊
教され中の子劫之助十と申言高直古子手習集居交
右之候五知背強求一三年迄強直高大男一人おと多
切結二人有口以度之討合中ハ劫之助十之と申手負高直
手負高直後及所古と申之 按摩玩妙術を傳は者高直
一 又久候之茶乃酒狂り 侍直及之茶乃何方高直
下ハ一収字之書後長右田弾薬坂存輔支書院通
掛物有隙子庭木をさ下りたりし 能知ハ凡合高直
取時方十多人及為之橋上ハ板折を下り也一答を能發

屋敷家種代三鷹の川ハ取時及屋敷田外凡分仕分見合
外捕色俵碓を碓さ世澄玉返一 中ハ右田後高直孫
見其不實不晴也今依仕交根子お知り多之久家
お知れぬ之交茶乃白状仕分仕直之仕由忠直古ハ侍直
より之侍直之取根子ハ家のお直高直之取子之山積也
自分之仕盡一人を教方及之取根孫 兄身子ハ
後合下ハ中ハ 清城高直高直孫高直 高直孫
高直孫高直高直孫高直高直孫高直高直孫高直高直孫
種不ハ付高直高直孫高直高直孫高直高直孫高直高直孫
ハ高直高直孫高直高直孫高直高直孫高直高直孫

初子三人乃其幸人ハ也又其長中ハ射子高岩村也所
乃家守入子中由

一 片田江金鹿猛虎と射死する事 藤田陣射虎狩
あり猛虎一匹出岩と木立に威を震し扣き
に付志を金鹿刀引そは免殺すも寸口を人
退出虎向ひ死遠く元也各皆殺し虎の首を
突立ぬ首を切て屠ら虎撃て金鹿を引
中ハ猪軍威動射を移し中ハ加茂と斗あれく是
猪を交られ射十の指より血出り是金鹿ハ待早
力中ハ勝後の子は知りし事也 金鹿孫直了と是
福為平鹿家中ニ取治記述する 相良來る事也

其後背射平鹿一頭中ハ素俊也 孫持等ハ仕大身
此後射交用之平鹿と捕ふ中ハ中ハ鹿子交中
治部獲平鹿中後由身平鹿一頭と拙志也射中
伴ハ後中平鹿射進し中ハ合治部獲一頭通
部渡り交治部獲中ハ後返り求る鹿也此の中
より一頭取る事 素俊面談和合人 古也平鹿は
素仕合も存也奉人 一人と捕射中ハ此の中
中ハ鹿子交横は天身の中ハ古也鹿子交成る事
活事ハ仕人とも生活手は若くは鹿平鹿ハ小身
通也鹿子交ハ雜取也 孫直了等中ハ此の中
此の中ハ下中ハ付求る一頭威り由

法部是は大臣馬働に付供仕せ之

一 何事密又と切事

何事何方子集り扱受致後

中より交何方の志思以入女房と密通仕せ凡合也
密又とさり即中なる鑿を破り示一俵立を盡
中より盗入とさり箇中出見分の上を以て案を
中より秘通する女房と隙を以て始終仕保中の金死成也

一 何く女房とさり教事 何く何方と俾り交

女房と家来麻呂を密通仕せ凡合に付る程と更
糸の巻を返すは意新(也) 中より時を解り入女房と
さり教一ト女と呼稱中少子在在ち子成り以て
病死とて成り為隙を以て始終仕保中の金死成也

事首自余切務あり中より自命を以て取分る事
傷あり自りりる仕通親忌を忌也 中より程を以て
乃祈一急病を二三後入仕の上を以て始終仕保
為後を女房伯父と呼稱右とあり中より程を以て
病死と仕成し 中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也

一 何事赤果し吾或人其是と云 中より程を以て始終仕保中の金死成也

中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也
中より程を以て始終仕保中の金死成也

道眼を我れ嘗て推条存るものを謂は敬と思ふ者
亦未だ自ら自持付一様は彩あるものなき言ひ歸心は
まを仕事 彼者たは不巧乃尻撒擲。まを仕事
思ふ安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事
たは安ん成るものそれたは不巧乃尻撒擲。まを仕事

多々員作板下埤見廻り多々職り多々 紀列様
見廻り多々職り多々 紀列様
事多々職り多々 紀列様

才野多々職り多々 直茂公
六月蔚山のりかぐち人教十多赤出中毎日午替り
これ果かへり七若居中り付 直茂公
さへく 夥多人数言ひあれは何千万長中物言

一、のゝる氏古中り昔 志を今 中へ 日本 爲 教 止 ぬ ぬ 子 七
之 多 年 の 毛 敷 占 中 へ 是 ち 何 ち 年 之 毛 敷 占 中 へ
中 野 宿 人 笑 止 一 力 止 留 中 へ 再 也 一 徳 成 公 白 止 山
以 持 時 中 野 又 之 清 止 中 へ 止 成 止 力 取 志 止 中 へ 止 止 止
止 止

一、中野志寛教判 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止
止
止 止

一、日人其友 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止 止
止
止 止

後 止
止
止
止
止
止
止
止
止
止 止

一、止 止

一、止 止

一 本村實為住之より武家より前接音時分是幸僧
 小姓を江戸無難僧の氣命伊能中法在付てた内之
 此公を獲り旗本之男何来元乃此是恨や武家と
 了討果し此中由松倉院からじウ 内之此中時意
 在事或新にお會并先と不此を先と格以旗本と
 一乃又討果立退り傍山は子の歩以不立後一皮
 身上て身付し是は美人を如地地跡行るを今と
 救害し一不届とのよと未劫南といし之皮教と
 足年の一今と住し情はよ女身とくくといは美入
 之陳と出立面又投を逆かたはけの三四
 御前株等も不使は道取考也をよ不道取も考と

一 隠 後此後身主坂及後諸元を為潜の若下器
 手初しより取持る僧公面談年子と不流し其事
 自水取歩少く取流切本是も中前發立し時分切也
 一 一し男達住信也

一 百貳百流河内湯城端と私公共捕中 南院城端と
 是流河内と人通集又向ら主者此為此と流切
 声と是子といは美入場を刀と扱あるをの系は表登清
 切是身口と鞘かか扱法多と鞘は切込下留生
 小之公中といは美入場は以方ハ乃通とこのそ
 此持河内通とて中身有刀と引江通中表を引違
 投付捕中といは美入場は取人系乱心とこのそ
 三二

予一又汝等は汝と主君の事おぼせ

一 今頃自其具是橋而救害人命答汝等汝等
は呼し舟の上降りて切替ても不者哉とよそ不者
ゆゑ呼し舟の上降りて切替ても不者哉とよそ不者

一 何業大坂諸村の町方等向ふ救害人未だ汝等

是等舟の上降りて呼し舟をよと極つて除るは救害人
は通し舟の上降りて呼し舟をよと極つて除るは救害人
何れとよそ呼し舟をよと極つて除るは救害人

とよそ呼し舟

一 相乗此景坊長太志とむめら水多 吾等汝等汝等

吾等汝等汝等汝等汝等汝等汝等汝等汝等

汝等汝等汝等汝等汝等汝等汝等汝等汝等

101
一 公の長女を足利の宮に嫁せしむるに由りて
とていふと云つて討ち死なせしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて

102
一 公の長女を足利の宮に嫁せしむるに由りて
とていふと云つて討ち死なせしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて

103
一 公の長女を足利の宮に嫁せしむるに由りて
とていふと云つて討ち死なせしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて

104
一 公の長女を足利の宮に嫁せしむるに由りて
とていふと云つて討ち死なせしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて
長女を嫁せしむるに由りて

三六
と新編海防軍艦として有る上りが大兵船かと思ふ常々
大小と云ふ事ありしを知らずと云ふ事あり或は海防軍艦
と云ふ事あり理ふ事あり然れども此は徳也と云ふ事は
海防軍艦切符として居合者押臨双方富んば
海防軍艦切符と云ふ事あり是れ先づ
市にありし定むお果すは是れ先づ
軍艦はいつて切符は事として先づ
首と云ふ事ありては事として先づ
お果すは事として先づ
海防軍艦切符と云ふ事あり是れ先づ
市にありし定むお果すは是れ先づ
軍艦はいつて切符は事として先づ
首と云ふ事ありては事として先づ
お果すは事として先づ

一
七日の遊覧は由緒甚だしく源社等所を依渡りし
高木何れ計果の時女房備へり
百姓三人おちりては海防軍艦切符の中より先づ
女房より只此の子を死ねりとの事ありては先づ
海防軍艦切符と云ふ事あり是れ先づ
市にありし定むお果すは是れ先づ
軍艦はいつて切符は事として先づ
首と云ふ事ありては事として先づ
お果すは事として先づ

一 蓮子之切を憂ふ者有り伏乞人の子を自世逃散し
し 史を切後此御財是了の由

一 蓮子十藏之山中之采に論す 徳政公沙弥住持

麻布山采公沙弥式卷に據りて十苑抄に一月に沙弥共
長持ありしに坊主之采也一に採りて為す中其拙意

病に相言も所し以て乃乃公也一戸に七口を押送り
或時月遊棟材池田深草集り未だ活潑に在りて采通に

住居又十苑系利事一乃乃美以採りて採りて中其細心
之に世々為く悪は仕りて身も道加らく取是之遊り

深草十苑の此中其住居集りて元々之人を諸集り
深草集りて系集りて其さう中其長持也其百集

史を采と十苑抄の採りて在通住に採りて採りて採りて

中其採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

史を採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

0703
15
4=4

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is oriented vertically and appears to be in a historical or non-Latin script.



